



Title	若年層デンマーク語における音変化：付記
Author(s)	間瀬, 英夫
Citation	IDUN –北欧研究–. 2011, 19, p. 73-88
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/96440
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

若年層デンマーク語における音変化 — 付記

間瀬 英夫

1. 若年層デンマーク語における音変化に関する追加項目

1.1. 序

筆者は間瀬(2002)でデンマークの若年層のデンマーク語発音について述べたが(間瀬(2005: § 11)はその縮約版である),その後, Grønnum (2001; 2005; 2007)を見て,筆者が述べたことがさらに裏づけられたほか,一部新しい事実が記述されていることを見ついた。間瀬(2002)の§ 2. 3. で, DnMs (=改良 Dania 式音声記号) [rä] (Dania (=Dania 式音声記号) [rɑ]) は若年層では唇音, 歯音の前で [rɑ] (Dania [rɑ]) に変化したが, 軟口蓋音の前では変化しないと述べた。現在でもその発音形を用いる若年層話者はいるが, Grønnum (2007: 36; 149 fn.5) は, この軟口蓋音の前の [rä] は二重母音に変わってきていると記述している。しかし, この二重母音についての両ページにおける記述には不統一, 不完全なところがあるため, Grønnum に問い合わせて, 何回かの私信で不明な点を明らかにすることができた。以下, この二重母音について Grønnum (2007) の訂正も兼ねて記述する。

1.2. 「新」二重母音

/r/ の後に現れるこの「新しい」二重母音の音価を同書 36 頁では IPA (=国際音声記号) [rɑj], 149 頁註 5 では IPA [rɑj] と表記している。すなわち, 二重母音の第 1 要素を前者では中舌/後舌の [ɑ] で, 後者では前舌の [a] で表記しているが, これは [a] となるべきとのことである。それゆえ, 以下では IPA [aj] ではなく IPA [ɑj] (= DnMs [aj]) で表記する。私信によれば, この「新しい」二重母音は主として複音節語形(=強強勢音節の後に弱強勢音節が続く型の複音節形)に現われ, 単音節語にはあまり現れないそうだが, Grønnum 自身は 36 頁で *dreng*, 149 頁で *bræk* の単音節形を示している。(本稿では, 同綴り異音語を除き語の日本語訳は省略する。) 同書 36 頁の *dreng* の音声表記に *stød* が欠落しているが, *stød* は“便宜上”二重母音の第 2 要素に置かれる。つまり, 非二重母音発音形 IPA ['d̥rɑŋ̊]/DnMs ['drãŋ̊] が二重母音発音形になると, DnMs ['draj'ŋ̊] となる。(以下では, 音声記号は DnMs を用いる; また音素記号も(IPA 的ではなく)DnMs に基づく記号を用いる; Grønnum は単音節形では強強勢記号を省略しているが, 本稿では強強勢記号を付して示す)。

この *stød* 生起および位置移動を見ると, *bræk* ['brajg] の二重母音にも *stød* が起

こって良いはずだが、実際には起こらない。つまりこの二重母音は、下記の「眞の」二重母音とは異なるようである。

(綴り字中の'はstødを表す)：

[ɑj]: mig leg' dej' teg'n streg' leje sejle
(cf. [ɔj]: møj lög' støj' dög'n strög' løje søjle)

これらは音声的にも音韻的にも「眞の」二重母音である、すなわち /aj/ (vs. /ɑj/) である ([ɑj] の [ɑ] は /a/ の条件変異音(間瀬(1994: 15f., 24f. 参照))。

一方、*dreng* ['draj'ŋ], *bræk* ['brajg], *brække* ['brajge], *strække* ['sdrajge] などにおける二重母音 [aj] は現段階では音韻的には /æ/ であり、その実現形が音声的二重母音となると解釈しなくてはならない。というのは、「本来の」(=(若年層より)年長の)世代の発音で *stød* をもつ *dreng* は *stød* を保つが、本来の *stød* をもたない *bræk* は音声的に二重母音の発音形になるが *stød* を獲得しない。つまり、*dreng* は /dræŋ'/ → ['draj'] → ['draj'ŋ] の派生プロセスをもち、*bræk* は /bræg/ (または /bræk/) → ['brag'] → ['brajg] の派生過程をたどると解釈しなくてはならない。なお、第2要素の[j]は「小さめの」[j̊]と表記する方が良いのかもしれない。Grønnumは私信で *bræk* (IPA) [b̥rak̊g̊]と書いてきたときがあるが、これはこの二重母音の第2要素が「眞の」二重母音の第2要素ほど明瞭な音ではなく、ごく短い「わたり音」的であることを示唆しているようだ。この二重母音は若年層で突如現れたものではなく、間瀬(1994: § 1.4)で述べたように、すでに Brink/Lund (1975: 128) で [ɑ] から [a]へのわたり音を含む [ɑj̊] (= [ɑi̊]) と記述されている「二重母音」、発音辞典 SDU (86) で記述されている「概略 [ɑj̊] で表記される「極端に短い二重母音 ekstrakort diftong」」、Becker-Christensen (1968: 46) で記述されている「[ɑ] から [a]への短い二重母音」が、若年層で明瞭に用いられるようになったのだと思われる(音節の中核である第1要素の音価は Grønnum の [a] か中舌/後舌の [ɑ] かは多少動搖があるとみるのが良いであろう)。例語を追加する：

dreng, *streng* ['dræŋ', 'sdræŋ'] → ['draj'ŋ', 'sdraj'ŋ'] (['draj'ŋ', 'sdraj'ŋ']),
trængsel ['træŋ'sel'] → ['traj'ŋsəl'] (['traj'ŋsəl']),
spræng!, *træng!* ['sbræŋ', 'træŋ'] → ['sbraj'ŋ', 'traj'ŋ'] (['sbraj'ŋ', 'traj'ŋ']),

しかし

fræk, *skræk* ['fräg', 'sgräg'] → ['frajg', 'sgra:jg'] (['frajg', 'sgra:jg']),
ræk!, *stræk!* ['räg', 'sdräg'] → ['rajg', 'sdrajg'] (['räg', 'sdräg']).

これらのことは Grønnum (2007) には一切記述されていないが、この筆者の解釈は正しいと Grønnum は私信で返答してきている。

dreng ['draj'ŋ] の *stød* 生起位置に関して Grønnum が“便宜上” [j] の後と述べる理由は、*stød* は音節のコーダ部分に起こっているのであるが、通常の *stød* 生起規

則(長母音(状音)の後または短母音(状音)後の自鳴子音(状音)の後)に鑑みて [j] の後に表記しているが、[ŋ] の後でも良いのかもしれないとのことである。

いずれにせよ、/æ/ は音節頭 /h/ に先行される場合、軟口蓋子音に後続されれば [aj] (年長の世代(=若年層より年長の世代)では [ɑ]) で実現されるが、その他の子音に後続される場合には /a/ の実現形の [ɑ] に吸収された(つまり、/æ/ は /h/ と非軟口蓋子音の間には現れない)。将来もし bræk などの ['brajg] が stød をとするようになった場合、すなわち、もし ['braj'g] となった場合には、「真の」二重母音となることになり、[aj] は [ɑj] と音韻的に対立することになるかもしれないが、これは今後の音変化の発展方向次第であろう。しかしいずれにせよ、/h/ と軟口蓋子音の間の環境の [aj] 対 [ɑj] のミニマルペアがあるかどうかは疑問である。なお、この新しい二重母音に関しての普及範囲などの本格的調査は未だ行なわれていないと Grønnum は言っている。

1.3. その他の音変化

Grønnum (2007: 145ff.; 164ff.) は若年層の発音の変化についてまとめているが、それによると、間瀬(2002: §§ 2.1, 3.8)で述べた長母音の短音化は、より徹底されてきているようだ。これは長母音が同一音節中の接近音(=無摩擦継続音) [ð, Ȑ, w, x] の前で短音化する現象であるが、単音節形では完全に実行されるようになったと述べている。(この短音化の変遷については、間瀬(2002: § 3.8)で詳しく述べている。) 短音化が起こると、長母音にあった stød は接近音の後に移る。この現象と補完的に、長母音後の(音節末) /v/ は [v] の発音形がなくなり、[w] のみとなる。この [w] は単音節中ばかりではなく、複音節中でも起こる。

(後舌長母音の後の綴り字 <g> が [w] で発音される場合にも、長母音は短音化される。なお、間瀬(2002: § 2.7)で述べたように、長母音後の [i] は若年層では一般に脱落するので、この場合には長母音が保持される。)

sød ['sø:ð] → ['søð'],
 liv ['li:w] → ['liw'], bog ['bå:w] → ['båw'],
 bord ['bo:Ȑ] → ['bor'],
 svag ['svå:Ȑ] → ['svå:] (または ['svåj']).

さらには、Grønnum (2007: 145) によると、[Ȑ] の前では長・短母音の区別はなくなった。たとえば hede と hedde は中和し、両者ともに短母音の ['heðə]/'heðȐ' または長母音の ['he:ðə]/['he:Ȑ'] となる。geder と gedder は中和し、両者ともに ['geðə] または ['ge:ðə] となる。そこで Grønnum は次の例を示している : *nede på bunden kan man se ulke og ['ge:ðə]* <水底にカジカと山羊(geder ['ge:ðə])/カワカマス(gedder ['ge:ðə]) が見える>。

このほかにも、Grønnum (2007: 146f.) は新しい発音の傾向を示しているが、未だ確立はしていないようである。

以上、間瀬(2002)以後の、Grønnum (2007) に述べられている若年層の発音に関する新しい記述を追加した。そこで、間瀬(2002: § 3.10)の表2に「新しい」二重母音による音声形と長母音の短音化の例、長母音と短母音の中和の例を追加した表(=表1)を以下に示す(注意：音声記号はDnMs)。

表1 若年層デンマーク語における音変化

(強勢記号は省略するが、強勢は語の第1音節にある；SDUの発音表記の後の数字は、当該音変化についての注番号を示す。) (音声記号はDnMs)
(発音辞典 SDU, PMH および辞書 NDO については参考文献参照。)

§	音変化	語 例	SDU	PMH	NDO	変化後
2.2.	ræ → rå	frisk	fræsg ⁴⁰	fræsg	fræsg	fråsg
2.3.	rä → rø	ret	räd ⁴⁴	räd	räd	rød
	rä = rä	træk	träg	träg	träg	träg
	rä → raj					trajg
2.4.	æ: ~ á:, æ →	kaer	kæ:.i, kæ:i ⁴⁸	kæ:.i, kái'	kæ:.i	kái'
	á:	kære	kæ:o ⁴⁸	kæ:o, kái:o	kæ:o	kái:o
2.5.	短母音の長音化	kaerre	káro ¹⁰	káro, kái:o	káro	kái:o
		dirre	diro ¹⁰	diro	diri, diri	di:o
		stirre	sdiro ¹⁰	sdiro	crips	sdi:o
2.6.	ru(:) → ro(:)	gru	gru. ⁴⁷	gru.	gru.	gro.
		russer	ruso ⁴⁷	ruso	ruso	roso
2.7.	i-脱落	eg	e:i, ei ²³	e:(i)	e:i	e:
3.4.	ræj ~ ræ:, rá:	tre	træj ⁴²	træ:	træj'	trä:
		kreds	kræj's ⁴²	kræ:s	kræ:s	krå:s
		kredse	kræj'se ⁴²	kræ:se	kræj'se	krå:se
3.5.	rö: ~ röj	fro	fröj', frö ⁴³	frö:	frö:	frö:
3.6.	ö: ~ ö: → ö:	gøre	gö:o, gö:o ⁴⁹	gö:o, gö:o	gö:o	gö:o
3.7.	v ~ w, → w	liv	li:v, liw'	li:v, liw'	li:w	liw'
		hæve	hæ:ve,	hæ:ve,	hæ:wə	hæ:wə
			hæ:wə			
追加	長母音の短音化	liv	li:v, liw'	li:v, liw'	li:w	liw'
		bog	bå:w, båw'	bå:w	bå:w	båw'
長短母音の中和	bord	bo:I, bo:r'	bo:I	bo:I	bo:r'	bo:r'
	hvid	vi:ð, við'	við'	við'	við'	við'
	sød	sø:ð, søð'	sø:ð	sø:ð	søð'	søð'
	hede	he:ðə	he:ðə	he:ðə	he:ðə	he:ðə/heðə
	hedde	heðə	heðə	heðə	heðə	he:ðə/heðə

2. 音声・音韻変化

2.1. 序

上記の表1からも分かるように、若年層における発音変化は主として母音の音質と音長の変化である。これらの変化は音声的変化にとどまる場合もあれば、音韻変化をもたらす場合もあると思われるが、Grønnum (2007: 145ff.; 164ff.) で述べられているように、これらの変化がどの程度に一般化してきているのか不確かな点が多々あるので、本稿では起こりうる音韻変化を指摘するだけにとどめ、組織的な音韻分析は今後の課題として残すことにする。なお、Grønnum (2001, 2005, 2007) では若年層の言語の音素数は年長の世代の言語の音素数と同じになっている。Grønnum (2007: 148-151; 157) の示す音素は次の通りである：/i:/, e:/, æ:/, /i/, e, æ/, /a:/, /ɑ/, /y:/, ø:, ö:/, /y, ø, ö/, /u:/, o:, å:/, /u, o, å/, /ø/.（上記箇所には実現形の詳細が示されている。）この音素数は年長の世代の音素の数と同じである、つまり間瀬(1994)と同じである(短母音音素に関しては間瀬の「解釈 I」と同一)。このような音素の設定の仕方は年長の世代の言語との比較および変化を示すためでもあろうとは思うが、この解釈が適切かどうかは大いに疑問である。しかし、そのことについては本稿の議論の都合で言及する点もあるが、徹底的に議論することは行なわない。(以下、Grønnum (2007) に言及する場合、省略して“G”で示し、たとえば同書の123頁に言及する場合、“G123”的ように示す。)

デンマーク語の長母音と短母音は、音節末接近音の前で短母音状音化または長母音状音化することによって音長の対立が中和することがあるが、全体としては、すなわち接近音の前以外では、どの世代の言語でも音韻的にも音声的にも明瞭に区別される。このことははつきりと認識しなくてはならない。

mil ['mi:l]	-	mild ['mil']	hvile ['vi:lø]	-	vilde ['vilø]
sen ['se:n]	-	sind ['sen']	mene ['me:nø]	-	minde ['menø]
hæl ['hæ:l]	-	held ['hæl']	læse ['læ:sø]	-	læsse ['læsø]
hval ['vá:l]	-	valg ['val'(j)]	kane ['kå:nø]	-	kande ['kane]
gran ['gra:n]	-	gran ['grøn']	rane ['rø:nø]	-	rande ['rønø]
hyl ['hy:l]	-	hyld ['hy:l']	hyle ['hy:lø]	-	hylde ['hylø]
føl! ['fø:l!]	-	følg! ['fø'l'(j)]	køle ['kø:lø]	-	kølle ['kølø]
fugl ['fu:l']	-	fuld ['ful']	kule ['ku:lø]	-	kulde ['kulø]
Jo [jø:]	-	jo [jø]	fokus ['fø:kus]	-	foto ['foto]
lân ['lå:n]	-	lund ['lân']	måne ['må:nø]	-	munde ['månø]

音長の中和は§2.2以下の場合に起こりうる。

2.2. 接近音の前での母音音調の中和

2.2.1. 長・短母音+接近音

同一音節内の接近音 [ð, w, ɿ] の前で長母音が、(とくに単音節中で)短音化したり、複音節形中の短母音が (/ər/, /rə/, /r̥ə/ →) [ɔ] (間瀬(1994: § 3.6)参照)の前で長音化することは以前から存在するものであるが (Brink/Lund (1975: 255), 発音辞典 SDU, PMH など参照)，若年層デンマーク語ではより一般的になってきた。この結果、「接近音の前の」長・短母音が音声的あるいは音韻的に中和する傾向が顕著になってきている。

短母音の実現形が長音化される場合、音質はそのままで長母音状音化される。長母音が短音化される場合には、音質はそのまま短母音状音化される。したがって、長・短母音音素の実現形が音長以外に音質の相違がない場合は、接近音の前以外の音環境で対立が保持されるため、音韻的(=音素的)状況に変化は起こらないが、音質に相違がある場合には音韻的状況が変わる可能性がある。「可能性がある」という意味は、音韻分析は解釈・分析の仕方が一通りではないので、音素数は変更しないで、実現形規則によって処理することも可能かもしれないからである。

2.2.2. [w] の前

単音節形では [w] の前の長母音は(音質はそのままで)短音化するため、長・短母音は両者とも短母音状音になるという形で(少なくとも)音声的に中和する。複音節形では、短母音は短母音状音のままである。長母音は複音節形ではふつう長母音状音で実現されるが、短音化することもありうる。(なお、G144 の Skema 10.6 では複音節形中の長母音はすべて長母音状音で示されている。次ページ参照。)

長母音が短音化する場合には、長・短母音の対立は、両者とも短母音状音で実現されるという形で(少なくとも)音声的には中和し、そして“短母音状音+[w]”は「(音声的)二重母音」を形成することになる。このような「二重母音」はすでに年長の世代で、“短母音(状音)+[w]”の形で多種あるが、若年層では長母音の短音化によって生ずる二重母音がさらに加えられる。[i], [ø] の前の長母音の短音化形とは異なり、本来の“短母音+[w]”の二重母音は *stød* をとることが多い。したがって、[w] に終わる二重母音では *stød* の有無が本来の短母音か長母音かを見分ける目安にはならない。(以下の例語は G141 Skema 10.3 (= /r/ に先行されない場合)の全てとその他に筆者がいくつか追加したもの。/r/ に先行される場合には実現形が異なることが多いが、いずれにせよ対立数は減少するので、ここでは取り上げない。)

短母音状音 + [w] (/r/ に先行されない場合)

	本来の短母音状音	短音化母音
[i]	tvivil ['tviw'l], ivrig ['iwri]	liv ['liw'], stiv ['sdiw']
[e]	peber ['pewə]	elev [e'lew'], lev! ['lew']
[æ]	ævl ['æw'l], evne ['æwnə]	skæv ['sgæw'], hæv! ['hæw']
[ɑ]		lav [形] ['låw'], stav ['sdåw']
[ɔ]	hav ['how'], tav ['tow']	
[y]	lyv [名] ['lyw'], tyvte ['tywdə]	lyv! ['lyw']
[ø]	øvrig ['øwri], øvre ['øwre]	døv ['døw'], løb ['løw'],
[ö]	øv ['öw'], mør! ['mow'], sørnig ['söwni]	
[o]	fjog ['fjåw'], fog ['faw']	jog ['jow'], biolog [bio'lo(w)]
[å]	dog ['dåw'], tov ['tåw'], sov ['såw']	klog ['klåw'], tog [名] ['tåw']

tav ['tow'] 対 stav ['sdåw'] (= [ɑ] 対 [å]) は音声的には対立する。また, jog ['jow'], biolog [bio'lo(w)] 対 fjog ['fjåw'], fog ['faw']; bog ['båw'], tog [名] ['tåw'] 対 dog ['dåw'], tov ['tåw'], sov ['såw'] (= [o] 対 [å] 対 [å]) も音声的には対立する。これらのことについては, § 2.3 で再び扱う。

上記の単音節における短音化母音は、複音節においては長母音状音のままである可能性が大きい。G144 Skema 10.6 では、複音節形の stød なしの例語は次のように全て長母音状音形が示されている : live ['li:wə], leve ['le:wə], hæve ['hæ:wə], lave ['lå:wə], lyve ['ly:wə], løve/løbe ['lø:wə], Tove ['to:wə], love/låge ['lå:wə]。上記の短音化形の語の屈折変化形は livet, (i) live; eleven, elever; leve(r); skæve; hæve(r); lave; staven, stave; lyve(r); døve; løbe(r); biologen, biologer; kloge; toget などであるが、これらが全て短母音状音で実現されるならば、[w] (← /v/) の前には短母音音素しか現れないことになるが、複音節形で長母音状音で実現されることから見て、単音節形における短音化母音を音韻的にどのように解釈するかは問題となろう。

2.2.3. 音節末 /r/ に後続される場合

/a(:)/+/r/, /å(:)/+/r/ は年長の世代以来ずっと、母音と音節末 /r/ の融合した音声形が用いられてきた (cf. 間瀬(1994: § 3.6)). Grønnum (2007) の示す若年層の言語でもまったく同様である : /a:r/ → [ɑ:] bare ['ba:a], varme ['va:mə], /ar/ → /a: par ['pa:] (G149,157); /å:r/ → [å:]: båre ['bå:å:], borte ['bå:də], /år/ → [å]: vor ['vå] (G151,157). したがって、この場合には /r/ [x] の前の長母音の短音化は適用されないことになるので、以下ではこれらの /a(:)/+/r/, /å(:)/+/r/ を除いた “母音+(音節末)/r/” を見していく。

単音節形では長母音音素の実現形は单一の音節末 /r/ の前では(音質はそのままで)短母音状音化される。そして、この音環境では長母音音素の実現形と短母音音素の実現形は音質が同じである短母音状音しか現れないことになる。(Grønnum (2007) は *gøre*, *gør*などの母音を各々 [gøːɔ], [gøːɪ] のように [ø(:)] (=IPA [œ(:)]) を用いているが、[ø(:)] を補助記号を用いないで表記する場合、発音辞典の記述などから、[ø(:)] より [ɔ(:)] の方が適切だと判断できるので、本稿では、以下(本表の例語を含め) [ɔ(:)] で表記する：*gøre* [gøːɔ], *gør* [gøːɪ].)

単音節形における [i] の前の短母音状音 (G.141 Skema 10.3 の例)

	本来の短母音状音	短音化母音
[i]	ir ['iɪ]	si(e)r ['sɪr']
[e]	Per ['peɪ]	ser ['sɛr']
[á]	bær ['báɪ]	sær ['sáɪ']
[y]	fyr ['fyɪ'] <松>	fyr! ['fyɪr']
[ø]	{下記本文参照}	før! ['før']
[ɔ]	hør ['hɔɪ'] <亜麻>	før ['fɔɪr'] [副]
[u]	skurk ['sgʊrk]	ur ['ʊr']
[o]	sort ['sɔɪd] <黒い>	ord ['ɔɪr']

([øɪ] の stød なしの例はないが、本来の短母音音素は /r/ の前では音韻的に 2 個しか区別されない。合成形 *mørne* ['mørnə] (G.141) などで本来の長母音の短音化形が「短母音音素」に転換されたとして認めうるが、いずれにせよ、これらは語全体としては複音節形である。) /r/_/r/ 環境の事例は網羅的には見られない：(G. 142 の例) (rør(lig) ['rørlɪ]), bror ['broɪ], rir ['riɪr'], ((langt) rær ['ræɪr'], gryr ['gryɪr'], rør ['røɪr'], Ruhr/rør ['røɪr'].)

単音節形では本来の長母音をもつ形は必ず stød をもつが、本来の“短母音+(单一)接近音”に終わる大多数の語では stød をもたない。それゆえ、長母音が短音化され、短母音状音になったとき、「短音化された」母音が本来は長母音であったのか、本来短母音であったのかが接近音後の stød の有無でしか分からないことが多い。

なお、本来の“短母音+[i]+子音”形には変化は起こらない、つまり短母音は短母音状音で実現される：birk ['bɪrk], forkert [fɔ'keɪr'd], tyrk ['tyr⁽ⁱ⁾g], mørk ['mørk], skurk ['sgʊrk], sort ['sɔɪd] <黒い>, port ['poɪr'd], torn ['tɔɪr'n]。このことは複音節形でも同様で、本来の短母音は短い音長のままである：kirke ['kiːrə], kerne ['kæːnə], myrde ['myrðə], mørne ['mørnə], mørke ['mørkə], spurte ['sburðə], porter ['çɒrðə]。

その他の場合には、複音節形では、/r/ は後続弱強勢母音 /ə/ と融合して [ɔ] で実現される(間瀬(1994: § 3. 6)参照)。この弱強勢 [ɔ] の前の短母音は長音化する。その結果、複音節形では本来の“短母音十弱強勢 [ɔ]”は本来の“長母音十弱強勢 [ɔ]”をもつ語形と同様に長母音状音で実現されるという形で長・短母音は中和する。つまり、単音節形では短母音状音のみ、複音節形では母音が [ɔ] に後続される場合には長母音状音のみが現われる: svire [svi:ɔ], svirre ([svi:rɔ] →) [svi:ɔ], være [và:ɔ], værre ([và:rɔ] →) [và:ɔ], bestyre [be'sdy:ɔ], forstyrre ([fɔ'sdy:rɔ] →) [fɔ'sdy:ɔ], døre (<扉>の複数形) [dö:ɔ], forstørre ([fɔ'sdö:rɔ] →) [fɔ'sdö:ɔ], skure [sgu:ɔ], skurre ([sgu:rɔ] →) [sgu:ɔ]。

もし短母音状音を短母音音素の実現形、そしてもし長母音状音を長母音音素の実現形と解釈するならば、/r/ に後続される場合には、単音節形では短母音音素(の実現形)しか現れず、複音節形では /rə/ の前では長母音音素(の実現形)しか現れないことになる。実際に不自然な分布と言えよう。そしてこの解釈は、語の原形・基本形と屈折形との対応などを考慮すると、不自然な解釈であると言わざるを得ない。

dyr ['dy:r'], dør¹ ['dør'] (dø <死ぬ>の現在形), dør² ['dö:r'] <扉> は年長の世代の言語では /y:/, /ø:/, /ɔ:/ の3個の長い音素を設定する(間瀬(1994: § 2. 4. 2)参照)が、若年層ではこれらが短母音状音で発音されているので、短母音音素の実現形とみることができるかもしだれないが、dyr <高価な> の -e 屈折形 dyre ['dy:ɔ], dyr <動物> の複数既知形 dyrene ['dy:ɔnə] などでは長母音状音が現われる。このような場合、「基底」音素として長母音とするのか短母音にするのかは未決定にしておく。なお、この3個の音素に限らず、動詞 si(e)r, ser の不定詞形 si ['si:], se ['se:] は長母音状音であり、形容詞 sær の -e 屈折形は sære ['så:ɔ], ur の複数形は ure ['u:ɔ], (tage til) orde ['o:ɔ] (imod), stor ['sdo:r'] の -e 屈折形は store ['sdo:ɔ] でいずれも長母音状音が現れる。これらは年長の世代の言語では長母音音素の実現形である。

2.2.4. [ɔ] の前

[ɔ] の前の長母音の短音化はずっと以前から見られる現象であり、単音節形でも複音節形でも見られ、すでに Brink/Lund (1975:§33) で彼らの対象の言語で見られる: ud ['u:ð] → ['uð'], ude ['u:ð] → ['uðð], flad ['flå:ð] → ['flåð], flade ['flå:ð] → ['flåðð], både ['bå:ð] → ['båðð], ned ['ne:ð] → ['neð'], badning ['bå:ðneŋ] → ['båðneŋ], politiet [pol'i:tì:ð] → [pol'i:tið'ð] (p.221)。

したがって、[ɔ] の前での長母音の短音化は若年層に特有のものではないのであるが、実際は年長者の言語と並行する音変化とはなっていない。それは複音節形での音変化によるものである。複音節形では長・短母音状音が無差別に現れる

(§1.3 参照). 単音節形では長母音は短音化・短母音状音化する. 短母音は長音化・長母音状音化しない. その結果, 母音は短母音状音しか現れないことになるので, 長・短母音の中和は短母音形のみということになる.

単音節形における [ð] の前の短母音状音 (G.141, 142 Skema 10.3, 10.4)

	X_[ð]		R_[ð]	
	本来の短母音	短音化母音	本来の短母音	短音化母音
[i]	bid ¹ ['bið]	bid ² ['bið']	vrid (sb) ['vrið]	rid! ['rið']
[e]	bed ³ ['beð]	bed! ⁴ ['beð']		
[æ]	med ['mæð]	væd! ['væð']	fred ['fræð]	
[å]		bad! ⁵ ['båð']		red! ['råð']
[a]	bad ⁶ ['bað]	bad ⁷ ['bað']	rad ['rað']	græd, grad ['grað']
[ɑ]				
[y]	syd ['syð']	gyd! ['gyð']	spryd ['sbryð']	bryd! ['bryð']
[ø]	skød ⁸ ['sgøð']	gød! ['geð']	(+ [rø])	rød ['röð']
[ð]				
[u]	skud ['sguð']	tud ['tuð']		
[o]		fod ['foð']	brud ⁹ ['broð']	Rued/rod ['roð']
[å]		båd ['båð']		råd ¹⁰ ['råð']
[ɔ]	skod ¹¹ ['sgøð']	skod! ¹² ['sgøð']	brod ['broð']	

(bid¹ ['bið'] <噛むこと>, bid² ['bið'] (bide <噛む> の命令形), bed³ <花壇>, bed⁴ (bide <噛む> の過去形), bad!⁵ ['båð'] (bade <入浴する> の命令形), bad⁶ <入浴>, bad⁷ (bede <頼む> の過去形 ; 年長の世代では ['bå:ð, 'båð, bað']). skød⁸ ['sgøð'] <ひざ>, <(洋服の)すそ, たれ>, brud⁹ ['broð'] <破壊>, råd¹⁰ ['råð'] <忠告>, skod¹¹ ['sgøð'] <(タバコの)吸いさし>, skod!¹² ['sgøð'] (skodde <(紙巻きタバコを)もみ消す> の命令形)). (例中の red! は rede の命令形 ; redde の命令形 red! は ['rað'] となる.) (R_[ð] 環境に短母音形の [röð] となる語はないが, [ð] の前以外での短母音形の [rö] は存在する : rødt [röd] [名] <赤>, røgt [rögd], røst [rösd], ryg [rög].)

([ð] は母音直後に現れ, 単音節単形態形では [ð] の後に子音がくることはない。(単音節)複形態語でも所有格の -s [s] および形容詞中性語尾 -t [d] が [ð] の後に現れるに過ぎない. [ð] は具体音韻的には /ð/ の実現形と解釈されるが, より抽象度の高い音韻解釈では /d/ の音節末実現とすることもできる.)

音節頭 /h/ に先行される音環境では先行されない場合とは音声形(=変異形)が異なることがあるが, いずれにせよ /h/ に先行されない音環境より対立数が減少

するので、以下では /r/ に先行されない音環境の音声形のみを対象とする。単音節形中の長母音が [ð] の前で短音化した場合、音節頭 /r/ に先行されない短音化した短母音状音は、§ 2.3 で扱う /o, å/ ([o, å, œ]) および /a/ ([å, a, œ]) を除き、音質的な相違はない。つまり短音化した長母音の実現形は短母音音素の実現形である短母音状音と同じ音質である。この環境では短母音音素の実現形のみが現れることになるが、本来の音素数の増減はない。本来の長母音をもっていた語形では [ð] の後に必ず stød を伴う。本来の短母音+[ð] に終わる語の大多数では [ð] に stød が起こらない。したがって、単音節形で [ð] に stød のある語の大多数は長母音の短音化形をもつ語ということになる。(本来の短母音+[ð] に終わる語で stød を持つ・持ち得る語： bid ['bið'] <かけら、一口> (cf. bid ['bið'] <噛むこと>), skid ['sgið'], od ['ɔð']; bred ['bræð', 'braeð'] (SDU), ['braeð'] (PMH), ['bræð'] (NDO) <岸(辺)>; klid ['klið', 'klið'] (SDU), ['klið'] (PMH), ['klið'] (NDO), nød ['nøð'] <木の実>, oxsyd [ɔg'syð'] (PMH), snyd ['snyð'], ud ['uð'].)

一方、複音節形では、[ð] の前では本来の長母音も本来の短母音も長母音母音状音または短母音状音で実現される (G.145, 166)。つまり、複音節形では長・短母音の中和は、その母音音長が長いか短いかのどちらか一方ではなく、両発音形が無差別に現れるということになる。この点は年長の世代の言語とは異なる。年長の世代では、上記の Brink/Lund にも見られるように複音節形でも長母音の短音化はあっても、短母音の長音化はない。

上述のように、G.145, 166 によると、複音節形で本来の長・短母音はどちらも、長・短母音状音で実現されるということであるが、この事実は音素数の増減には関係しない。つまり、複音節形における音素数は単音節形における音素および実現形の数より多くなることはない。

§ 2.2.3 で、単音節形で短母音状音の語形に対応の複音節形での長母音状音の語形の対応を示し(たとえば sær – sære, dyr – dyre, ur – ure, stor – store), 単音節形における短母音状音形が基底では長母音の実現形の可能性があること、あるいは単音節形の短母音状音が短母音の実現形で、複音節屈折形では長母音化する可能性を示唆したが、本節の [ð] に後続され場合には複音節形で長母音状音も短母音状音も無差別に現れるなら、複音節形と単音節形の母音音長を基底で比較することはできないことになる。

bed [名] – bedet, bede; bed! – bede; væd! – væde/vædde; bad – badet, bade; bad! – bade; gyd! – gyde; skød [名] – skødet, skødene; gød! – goede; skud – skuddet, skudene; tud – tudet, tudene; flod <大河> – floden, floder; båd – båden, både; skod – skoddet, skoddene; skod! – skodde.

つまり、単音節形における短母音状音は短母音音素の実現形と解釈せざるを得な

いことになる。しかしながら、G144 Skema 10.6 では複音節形では本来の長母音は長母音状音形が示されている：bide ['bi:ðø], bede ['be:ðø], væde ['væ:ðø], bade ['bå:ðø]; syde [動] ['sy:ðø], søde [動] (?) ['sø:ðø]; bude ['bu:ðø], bode ['bo:ðø], både ['bå:ðø]; ride ['ri:ðø], vrede ['vrå:ðø], græde ['gra:ðø]; bryde ['bry:ðø], brøde ['brø:ðø]; rude/rode ['ro:ðø], råde ['rå:ðø]。これらの例から察するところ、複音節形における音長の中和、すなわち、長・短母音無差別の実現は未だに徹底されていないかもしれない。そうだとすると、単音節形における短母音状音は全て短母音音素の実現形とはならないかもしれない。

2.3. 音声形の対立数の増加

2.3.1. /a/

/a:/ と /a/ の実現形は年長の世代では音長ばかりではなく音質の相違もある。非 /r/ 環境では /a:/ は [å:], /a/ は [a]（後続子音がゼロまたは歯子音の場合）または [ɑ]（その他の場合）である。それゆえ、/a:/ の短音化した実現形 [å] は、/a/ の [ð] の前の実現形 [a] と少なくとも音声的に対立することになる。

bad¹ ['bað'] (bade <入浴する> の命令形)

bad² ['bað'] (bede <頼む> の過去形)

bad³ ['bað] <入浴>

この場合、若年層では [å] と [a] が [ð] の前で音韻的に対立することになる。つまり、[å] と [a] を /a/ と /a/ としなくてはならないことになる。ただし、これは非 /r/ に先行され、[ð] (/ð/) に後続される音環境の [å] と [a] にのみ適用されることになる。この解釈が適切かどうか疑問であるが、§ 2.2.2 で示した tav ['tåw'] 対 stav ['sdåw'] (= [ɑ] 対 [å]) も音声的には対立する。このほかの環境では [å] は単音節でも複音節でも長母音状音 [å:] (← /a:/) としてのみ現れる。しかし、G145 によれば、この環境の /a/ の実現形は [å] となってきたているようである。もしそうなら、新しい音素を設定する必要はないことになる。（SDU によれば、bad² はすでに yngre の世代(=1930 年以後生まれ)で ['bað'] または ['bað'] とある。）

2.3.2. 後舌短母音

単音節形における後舌短母音状音の分布は次のようになる。

(下線の語=本来の長母音；綴り字中の' = stød, ' = 語頭音節以外の第1強勢)

	X_X			R_X	
	X_X	X_[w]	X_[ð]	R_X/[w]	R_[ð]
[u]	du, slut, busk		slud, ud', <u>klud'</u>		
[o] ¹	jo, ni'veau			fru, bu'reau	
[o] ²		<u>jog'</u> , bio <u>log'</u>	<u>fod'</u> , <u>blod'</u>	krudt, trup, rusk <u>drog'</u>	brud ¹ , <u>brud'</u> ² rod'
[å]	ost	Fog, <u>bog'</u>	<u>båd'</u> , <u>våd'</u>	rust, <u>krog'</u>	<u>råd'</u> ¹ , <u>tråd'</u>
[ɔ]	kop, post, så		vod, od'	krop, trods, råbt	brod, råd ²
[å]		tov, sov'		rov, grov'	

[o]¹ 開音節中, [o]² 閉音節中, [å] 閉音節中。

例語のうち, jo, jog, Fog, tov, sov, fod, båd は G.141 Skema 10.3 中の例, fru, krudt, drog (drage の過去形), krog, rov, grov, brud¹ <破壊>, rod [roð'], råd¹ [råð'] は G.142 Skema 10.4 中の例. brud¹ ([bruð] → ['broð] <破壊>), brud² ([bruð] → ['bruð'] → ['broð'] <花嫁>), råd¹ ['råð'] <助言>, råd² ['røð'] <(材木の)腐朽>.

Grønnum では, /o/, /å/ の実現形は次のようなと記述されている (G.151) ;

/o/ → [o]: (1) 開音節中で ; foto ['foto] /foto/, proto ['proto] /proto/;

(2) /r/ の前 : skjorte ['sgjɔ:rðə] /skjortə/;

(3) 少数の語の語頭弱強勢閉音節中で : soldat [sol'då:d] /sol'dart/.

[å]: 閉音節中で : (feje-)kost ['kåsd] /kost/, rust ['råsd] /rost/.

/å/ → [å]: (1) /r/ の前 : vor ['vå] /vår/;

(2) /v/ の前 : tov ['tåw] /tåw/;

[ɔ] その他の場合 : krop ['krøb] /kråp/, tosse ['tøsə] /tåsə/.

これは間瀬(1994: § 3.5.2)の解釈 I と同じである。

/r/ の前の [o] は問題がないので, 以下では取り上げない.

上記の音韻解釈で問題となりうるのは /o/ の実現形として, [o] が開音節に, [å] が閉音節に現れるという点である. 現実には [w], [ð] の前での長母音の短音化によって [o] も [å] も閉音節に現れることになるからである.

[w], [ð] の前以外では busk ['busg] – ost ['asd] – post ['pøsd] あるいは kup ['kub] – skub ['sgåb] – kop ['kob] のように, /u, o, å/ は各々 [u, å, œ] で実現されると解釈できよう. /r/ に先行される場合, [u] は現れなくなる : krudt ['krod], rusk ['rosg] – rust ['råsd] – trods ['tros]. この場合の [o, å, œ] を各々 /u, o, å/ の実現形とできるかもしれないが, [o] は /u/ の /r/ と子音の間の実現形となることになる. (因みに, ずっと以前から, 繰り字 <u> が短母音を表すとき, 鼻子音字に後続されると, hun, hund, hundrede, pund, kunne を除き, [u] は決して現れない. <u> は [å] となる : rum ['råm'], rund ['rån'], runge ['råŋe], etc.)

[w] の前では jog ['jow'] – bog ['båw'] – sov ['såw'] (あるいは /r/_[w]: drog ['drow'] – krog ['kråw'] – grov ['gråw']) で [o, å, œ] の 3 個が音声的に対立するが, これも各々 /u, o, å/ の実現形と解釈できるかもしれない. この場合も [o] は /u/ の実現形ということになるが. (なお, 繰り字 <uv> の語は luv¹², duve, stuve しかないと思われるが, SDU および PMH に見られる年長の世代の発音では次のようになる : luv <ラシャ・ビロードなどの表面の毛羽> (SDU) (明瞭形) ['lu:v], (普通形) ['lu:], 非常に明瞭に発音した場合あるいは稀に ['lu:w]; (PMH) ['lu:(v)]; luv <風上側> (SDU) (明瞭形) ['lu:v], (普通形) ['lu:], 非常に明瞭に発音した場合あるいは稀に ['lu:w]; (PMH) (形容詞として) ['lu:(v)]; duve (SDU) (明瞭形, 普通形とともに) ['du:və], より不明瞭な発音で ['du:wə], あるいは ['du:u]; (PMH) ['du:(v)ə]; stuve (SDU) (明瞭形) ['sdu:və], (普通形) ['sdu:u], より明瞭な発音 ['sdu:wə]; (PMH) ['sdu:(v)ə]. つまり, [v] – [w] – [u] の調音点同化により, 現実には <v> は発音されないとみなしてよいと思われる.)

[ð] の前では後舌短母音状音は klud ['kluð'] – blod ['bloð'] – våd ['våð'] – od ['ɔð'] で, [u] – [o] – [å] – [œ] の 4 個の母音が音声的に対立する. この場合には 4 個の音素を設定する必要があるかもしれない. 筆者は間瀬(1994: § 3.5.3)で年長の世代の言語の解釈 II として, 4 個の音素を設定することを提案しているが, この解釈はそのまま若年層の言語にも当てはまる可能性がある. (しかし, これは長母音は長母音状音または短母音状音で実現され, 短母音の長音化が存在しない場合のことである.) この解釈の場合には [u] – [o] – [å] – [œ] に開音節とか閉音節とかの音環境に関する規定は不要であるが, [œ] (/ø/) の場合のみ [w] の前以外という指定が必要となる (/ø/ は [w] (/v/) の前では [å] となる).

3. おわりに

§ 2.2, 2.3 で若年層の言語が年長の世代の言語と異なる音素が設定される可能性を示唆したが, それはこの言語の今後の発展の仕方次第であり, 今後の動向を注意深く見ていく必要があろう.

(2010 年 10 月)

Lydudviklinger i ”unge”s danske rigsmål: Tillæg

Hideo Mase

Resumé

I *IDUN* 15 (2002) skrev jeg om ” Lydudviklinger i ”unge”s danske rigsmål og lydskrift i udtaleordbøgerne”. Derefter fik jeg yderligere oplysninger om lydudviklinger i den unge eller yngre generation fra Grønnum (2001; 2005; 2007). (DnMs-lydskrift) [ra] foran dorsale konsonanter er blevet diftongen [raj] hos mange talere (Grønnum (2007: 36; 149 fn.5)). Men beskrivelsen om denne diftong er ikke uden trykfejl, og jeg fik kontakt med forfatteren og fik følgende svar: diftongen er [raj], ikke [raj], og den er en fonetisk manifestasjon af /ræ/ foran dorsale konsonanter, idet [raj] fx i *bræk* [brajg], som er udviklet fra [bræg] → [brag], skaffer sig aldrig stød. En ”ægte” diftong, fx *grej* [groj'], *regn* [raj'n], har stød på [j] og er fonologisk /aj/. En anden interessant fænomen Grønnum henviser til, er fuldstændigt sammenfald af vokallængden foran [ø]. ”Ord som *hede*, *hedde*; *gede*, *gedder* kontrasterede tidligere ... De tenderer nu mod at falde sammen, og udtalen kan enten være lang eller kort, uanset hvilket ord der er tale om.” (Grønnum (2007: 166).

I §2 viser jeg fonetiske manifestationer og fonetiske kontraster efter nye lydudviklinger, som muligvis kan udvikle sig til nye fonologiske kontraster. Gennemgående fonologiske analyser vises ikke her, idet de nye udtaletendenser ikke er helt etableret.

参考文献

(欧文文献の発行地は、特記のないかぎり København)

- Basbøll, Hans. 1969. “The phoneme system of Advanced Standard Copenhagen”, *ARIPUC (=Annual Report of the Institute of Phonetics, University of Copenhagen)*, Vol. 3, 33-54.
- Basbøll, Hans & Johannes Wagner. 1985. *Kontrastive Phonologie des Deutschen und Dänischen. Segmentale Wortphonologie und -phonetik*. Tübingen : Max Niemeyer

Verlag.

- Becker-Christensen, Christian. 1988. *Bogstav og Lyd. Dansk retskrivning og rigsmålsudtale*. Bind 1. Gyldendal.
- Brink, Lars & Jørgen Lund. 1974. *Udtaleforskelle i Danmark. Aldersbestemte – geografiske – sociale*. Gjellerup.
- Brink, Lars & Jørgen Lund. 1975. *Dansk rigsmål. Lydudviklingen siden 1840 med særligt henblik på sociolekterne i København*. Gyldendal.
- Grønnum, Nina. 1996. "Danish vowels – scratching the recent surface in a phonological experiment". *Acta Linguistica Hafnia*, Vol. 28, 5-63. The Linguistic Circle, Copenhagen.
- Grønnum, Nina. 2001. *Fonetik og Fonologi. Almen og Dansk*. Nye revideret udgave. Akademisk Forlag.
- Grønnum, Nina. 2005. *Fonetik og Fonologi. Almen og Dansk*. Tredje udgave. Akademisk Forlag.
- Grønnum, Nina. 2007. *Rødgød med Fløde. En lille bog om dansk fonetik*. Akademisk Forlag.
- Thorsen, Nina & Oluf Thorsen. 1986. *Fonetik for sprogstuderende*. 3. reviderede udgave, 8. oplag. Københavns Universitet.
- 間瀬英夫. 1990. 「Peter Molbæk Hansen 著 『デンマーク語発音辞典』について」, *IDUN* IX号, 93-126. 大阪外国语大学デンマーク語・スウェーデン語研究室.
- . 1994. 「デンマーク語の母音」, *IDUN* 11 号, 1-42. 大阪外国语大学デンマーク語・スウェーデン語研究室.
- . 2002. 「若年層デンマーク語における音変化と発音辞典の表記」, *IDUN* 15 号, 1-14. 大阪外国语大学デンマーク語・スウェーデン語研究室.
- . 2005. 『デンマーク語学ハンドブック — デンマーク語文法述語集 — — デンマーク語音表記のための音声記号 —』. 大阪外国语大学.

発音辞典, 発音表記付き辞典 :

- NDO = Becker-Christensen, Christian *et al.* (red.). 2001. *Politikens Nudansk Ordbog med etymologi*. Politikens Forlag. 2. udgave, 1. oplag.
- PMH = Hansen, Peter Molbæk. 1990. *Udtaleordbog*. Gyldendal.
- SDU = Brink, Lars *et al.* 1991. *Den Store Danske Udtaleordbog*. Munksgaard.